第三十一回 邦楽演奏会

―邦楽名曲選―

2001都民芸術フェスティバル

平成十三年三月八日（木）

国立劇場小劇場

第一部 正午開演
第二部 午後四時開演

三時半終演
七時半終演

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会
中央区銀座4ノ13ノ11文明堂3F
電話 三五四一―五四七一番

清元協会
世田谷区桜一ノ三ノ十二
電話 三七〇六―九五二七番

財団法人 古曲会
中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館
電話 三五七一―〇二一六番

新内協会
新宿区大久保二ノ二三ノ二
電話 三二〇〇―四六五三番

常磐津協会
港区南青山五ノ十三ノ三
電話 三四〇七―七四五三番

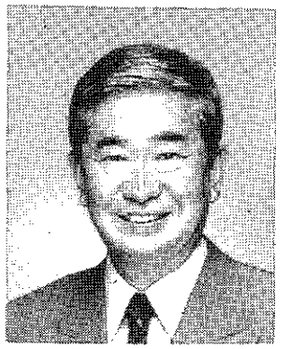
社団法人 長唄協会
中央区銀座二ノ十一ノ十九ノ四
電話 三五四二―六五六四番

社団法人 日本三曲協会
港区赤坂二ノ十五ノ十二ノ四〇三
電話 三五八五―九九一六番

（五十音順）

助成 東京都芸団協・邦楽振興基金

実演家著作隣接権センター（CPRA）



2001 都民芸術フェスティバル

東京都知事　石　原　慎　太　郎

都民芸術フェスティバルは、質の高い芸術文化に触れる機会を広く都民の皆さんに提供するとともに、東京における芸術文化活動の振興を目的として、東京都が芸術文化団体の公演に助成して開催するものです。

本フェスティバルは今年で三十三回目を迎えましたが、開催を心待ちにしているファンの方も多く、今や東京の新春を彩る恒例行事として定着しています。関係団体の皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。

芸術文化は私たちの日常生活を豊かにし、都市の魅力を高める重要な要素です。二十一世紀の首都東京は、長い歴史に根ざす文化と伝統を持ち、独自の文化情報を発信し、多様な文化の交流拠点として世界中の人々を惹きつける都市でありたいと思います。

新世紀の幕開けに、皆さんには、新春の一月十九日から桜のほころぶ三月三十一日まで、都内各地で繰り広げられる音楽、演劇、舞踊、伝統芸能の多彩な芸術文化を心ゆくまでお楽しみいただきたいと思います。

終わりに、本フェスティバルに参加された 邦楽連合会の公演のご成功と、今後ますますのご活躍を祈念して、挨拶といたします。

2001都民芸術フェスティバル公演一覧

分野	種目	演目	期日・会場		問い合わせ先
音楽	オペラ	ウェルティ作曲 「マクベス」 （藤原歌劇団）	2/2・3・4 東京文化会館		（財）日本オペラ振興会 TEL 03-5466-3181
		ヨハン・シュトラウス作曲 オペレッタ「こうもり」 （二期会）	2/16・17・18 東京文化会館		（財）二期会オペラ振興会 TEL 03-3796-1831
		牧野由多可作曲 「くさびら」「黒塚」 （日本オペラ協会）	3/3・4 ティアラこうとう		（財）日本オペラ振興会 TEL 03-5466-3181
	オーケストラ	新星日響	1月19日	東京芸術劇場	（社）日本演奏連盟 TEL 03-3437-6837
		新日本フィル	2月2日	東京芸術劇場	
		東京フィル	2月12日	東京芸術劇場	
		東京シティ・フィル	2月16日	東京芸術劇場	
		都響	2月24日	東京芸術劇場	
		日本フィル	3月7日	東京芸術劇場	
		東響	3月12日	東京芸術劇場	
		読売日響	3月24日	東京芸術劇場	
		N響	3月30日	東京文化会館	
	ポピュラー	ジャズ・スタンダード ～21世紀に向けて～	3/6　日比谷公会堂		（社）日本音楽家協会 TEL 03-3585-3903
		永遠のラテン名曲集	3/7　日比谷公会堂		
		シャンソン＆タンゴハイライト	3/8　日比谷公会堂		
	邦楽	第31回邦楽演奏会	3/8　国立劇場小劇場		日本三曲協会 TEL 03-3585-9916
演劇	現代演劇	「渥美清子の青春」	3/11～3/18 紀伊國屋サザンシアター		（社）日本劇団協議会 TEL 03-3341-8151
	児童 青少年演劇	「キズだらけのりんご」	3/10～3/31 東京芸術劇場　他		日本児童・青少年演劇劇団協議会 TEL 03-5353-6821
舞踊	バレエ	「白鳥の湖」	2/8・9・10 東京文化会館		（社）日本バレエ協会 TEL 03-3499-5524
		「四大バレエ団競演」	3/2・4・10・11 東京文化会館		東京バレエ協議会 TEL 03-3791-7000
	現代舞踊	「ダンスを喰べる」 「青の行進曲」 「悪党と犬をつれた女」	1/23・24　東京文化会館		（社）現代舞踊協会 TEL 03-3400-4544
	日本舞踊	第44回日本舞踊協会公演	2/7・8・9　国立劇場大劇場		（社）日本舞踊協会 TEL 03-3533-6455
伝統芸能	能楽	第28回都民能	1/20　国立能楽堂		（社）能楽協会 TEL 03-3574-6441
		第41回式　能	2/18　国立能楽堂		
	民俗芸能	第32回 東京都民俗芸能大会	3/3・4 東京芸術劇場		東京都民俗芸能大会実行委員会 事務局TEL 03-3462-1351
	寄席芸能	第31回都民寄席	2/11～ 東京芸術劇場　他		都民寄席実行委員会事務局 TEL 03-5286-0876

第一部　番組　（正午開演）

一、三曲　吾妻獅子

箏	星野文伸加	三弦 米川文威清
同	齊藤文香代妃	同 五月女文紀
同	鈴木文徳加	尺八 川瀬庸輔
同	広沢文尤加	

二、清元　道行浮塒鷗（お染）

浄瑠璃	清元美好大夫	三味線 清元勝三郎
同	清元佳栄太夫	同 清元志寿造
同	清元清栄太夫	上調子 清元栄吉

三、長唄　越後獅子

唄	東音市川春子	三味線 東音田島佳子
同	東音岩瀬尚美	同 東音伊勢弥生
同	東音大森多津子	同 東音岩田喜美子

四、美太夫　関取千両幟（猪名川内の段）

おとわ　竹本　駒之助　三味線　鶴澤津賀寿
猪名川　竹本　朝重　胡弓　鶴澤寛也
鉄ケ嶽　竹本　越孝
大坂屋　竹本　土佐恵
呼遣い　竹本　土佐子

五、新内若木仇名草（蘭蝶）

浄瑠璃　新内　光志万　三味線　鶴賀喜代寿郎
同　新内　光喜代　上調子　鶴賀伊勢次郎
同　新内　光蝶

六、一中節　旅路の篠懸

浄瑠璃　宇治紫文　三味線　宇治文蝶
同　宇治紫仙　同　宇治紫行

七、常磐津　戎詣恋釣針（釣女）

浄瑠璃　常磐津清若太夫　三味線　岸澤巳之吉
同　常磐津光勢太夫　同　常磐津紘寿郎
同　常磐津若音太夫　上調子　岸澤式松
同　常磐津若羽太夫

第二部　番　組　（午後四時開演）

一、義太夫　関取千両幟―櫓太鼓曲弾き―

三味線　鶴澤寛也
同　鶴澤駒治
同　鶴澤三寿々
同　鶴澤紋栄
同　野澤喜恵博
同　鶴澤賀寿

二、新内　明烏夢泡雪―雪責め―

浄瑠璃　鶴賀寿美代
同　鶴賀伊勢千代
同　鶴賀伊勢子
三味線　新内勝一朗
上調子　鶴賀伊勢一郎

三、清元　弥生の花浅草祭（三社祭）

浄瑠璃　清元延初磨
同　清元延明寿
同　清元延清恵
同　清元延邦寿
同　清元延佳月
三味線　清元延志佐
同　清元延祐幸
同　清元延美夏
上調子　清元延知寿

四、尺八巣鶴鈴慕

尺八1　田中康盟
尺八2　山戸朋盟
尺八3　水野香盟
笛　松山龍盟

五、常磐津勢獅子劇場花詈（勢獅子）

浄瑠璃　常磐津文字由吉　三味線　岸澤満佐子
同　常磐津美奈衛　同
同　常磐津孝野　同　常磐津文字東久
同　岸沢満佐春　上調子　常磐津文字東華　常磐津文字東勢

六、荻江鐘の岬

唄　荻江ちか　三味線　荻江都世
同　荻江祥　同　荻江のぶ
同　荻江恵美　同　荻江理
同　荻江香幸　同　荻江香世
等　米川裕枝

七、長唄勧進帳—読上げ問答入り—

唄　吉住小三郎　三味線　稀音家六四郎
同　吉住小良次　同　稀音家助三朗
同　吉住小三次朗　同　稀音家三郎助
同　吉住小佐久朗　同　稀音家六公郎
同　吉住小貴三郎　上調子　稀音家祐介

囃子　笛　福原徹彦
小鼓　梅屋雅一
小鼓　望月慎一
立鼓　望月太喜雄
大鼓　中井一夫

解説（演奏順）

解説　竹内道敬

第一部

一、三曲吾妻獅子

「東獅子」とも書く。作詞者は「大坂長堀のひら又こと丁々」と伝える。この「丁々」は号、また「ひら又」はたとえば「平野屋又右衛門」などの略称であろう。作曲者は十八世紀後半に大坂で活躍した峰崎勾当。寛政八年（一七九六）三月に出版願いが出された『増補新成鶴の声』に歌詞が収められているので、この頃に作曲されたものといわれている。

内容は『伊勢物語』で有名な業平東下りを歌い出しに、その業平を気取って江戸に下った男が、吉原の遊女となじんで後朝の別れを惜しみ、扇をかざして獅子舞を舞うというもの。獅子の狂いの乱れに恋に狂う乱れをかけて、華やかな手事をきかせるのがねらいの曲。構成は、前歌―手事―後歌という、手事ものの標準的なスタイル。獅子ものの代表作のひとつ。なお「まめ男」とは業平のこと。

二、清元道行浮塘烏（お染）

勝井源八作詞、初世清元斎兵衛作曲。文政八年（一八二五）十一月中村座で初世清元栄寿太夫、初世清元斎兵衛ほかで初演。この年五月に初世清元延寿太夫が殺害されており、その息子の栄寿太夫が初めてタテを勤めた、清元にとっても記念すべき曲。

お染久松の話は宝永五年（一七〇八）、大阪の油屋の丁稚久松が、主家の幼女お染を過って川へ落として水死させ、申しわけに土蔵で首を吊って死んだのが実説とされるが、同十年に質店油屋の娘のそめと丁稚久松が心中したという説もある。それをすぐに脚色したのが「心中鬼門角」というが、少年と少女、しかも質屋の娘と奉公人というので話題になり、歌祭文や人形浄瑠璃に脚色され、多くの「お染久松もの」が生れた。江戸歌舞伎では場所を江戸に移した作品が多く、趣向を変え、町人社会の身分違いの恋の悲劇として親しまれ、喜ばれた。

お染と久松が心中しようと隅田堤まで来たところ。そこへ心中者と悟った猿曳が出て、節祭文で浮き名を流してはいけないと軽く意見をし、さらに万歳を舞って去って行く。そのあと二人は死出の旅へおもむくと暗示して終る。

三、長唄越後獅子

松井幸三作詞、九世杵屋六左衛門作曲。文化八年（一八一一）中村座で、三世中村歌右衛門が踊った七変化舞踊「遅桜手爾葉七字」の一として初演。地歌の「越後獅子」「晒」などを参考に大急ぎで作曲されたというが、変化があり、長唄の代表的名曲としてよく知られている。

越後地方から江戸へ出稼ぎに来た角兵衛獅子が、一休みして故郷を思い出し、あと布晒しになるというもので、特にストーリーはない。なおプッチーニのオペラ「蝶々夫人」に「己が姿を」のあたりが取り入れられている。

四、義太夫　関取千両幟

明和四年（一七六七）八月、大坂竹本座で竹本鐘太夫らで初演。近松半二ほかの合作。当時大坂で人気のあった池田の岩川と天満の千田川という相撲取りをモデルに、「双蝶々曲輪日記」の濡髪長五郎と放駒長吉の話を下敷きにして、力士の達引を描いたもの。二段目の「髪梳き」と「相撲場」が有名。歌舞伎化もされ、また常磐津や新内にも脚色されている。

人気力士猪名川は、恩を受けた鶴屋の若旦那礼三郎のために、その愛人錦木太夫の身請金二百両を作らなければならない。一方、錦木に横恋慕している一原九平太は、猪名川の競争相手鉄ケ嶽を使って身請けしようとする。今日中に二百両ができなければ、錦木は九平太にとられてしまう。そのぎりぎりの日、鉄ケ嶽が連れ立って猪名川の家へ来るところから。猪名川は錦木の身請けを延期してくれるように鉄ケ嶽に頼むが、鉄ケ嶽は先日九平太が恵海庵で猪名川にひどい目にあわされた仕返しを頼まれたといって、さんざんに踏みさいなむ。そして魚心あれば水心といって、今日の取り組みでは勝を譲るように匂わせて去る。猪名川は八百長で負ける覚悟で土俵へ向かう。それと悟った女房おとわは、夫の大事と跡を追うまで。

なおこのあとは、おとわが自分の身を売って二百両の金を作り、相撲場へかけつける。猪名川の顔も立ち、錦木を請け出し、さらに筋は複雑に展開するが、たいていここだけが演奏される。

五、新内若木仇名草（蘭蝶）

初世鶴賀若狭掾作詞・作曲。安永（一七七二～八一）の末ごろの作品と思われる。全曲を演奏すると一時間半ほどもかかる大曲なので、今日はその一部を演奏する。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振師は、榊屋の此糸となじみを重ねて、女房お宮が身を売った金まで

入れ揚げてしまう。お宮は此糸を訪ねて逢い、蘭蝶との縁を切ってくれと頼む。此糸はそれを承知したが、しかし結局蘭蝶と此糸は、お宮の願いも空しく心中してしまうだろうという筋。

天涯孤独で、頼りになる男のいない此糸、夫に尽くすお宮、その二人の女性の間でどうにもならない蘭蝶。貧しい庶民のぎりぎりの暮しのなかでの男女の関係は、いつの世も変わりがない。やさしい言葉をかけられて嬉しかった此糸のクドキ「四ツ谷で初めて」、お宮の血を吐くようなクドキ「縁でこそあれ」が双璧で、とくに後者は新内節の代名詞にもなっている。これと第二部で演奏される「明烏」、「伊太八」を新内節の三大名作という。

今日はその長い物語をアレンジして、ふたつの有名なクドキをおきかせする。なお「ああうれしやと思うたは…」以下の三味線が、いわゆる新内流しの手に使われている。あわせてそのあたりもきいていただきたい。

六、一中節　旅路の篠懸

文化年間（一八〇四～一八）に初世菅野序遊が、能の「安宅」から「安宅道行」と「安宅勧進帳」を作曲した。これは今日第二部で演奏される長唄「勧進帳」に大きな影響を与えたことはよく知られている。そのうち「安宅道行」をもとに初世宇治紫文斎が嘉永三年（一八五〇）ごろに脚色し、作曲したもの。

兄頼朝の不興を受け、都を後にした義経、弁慶らは、海津の浦に着き、安宅の関へ急ぐ。その途中で義経が、水鳥の羽音や松風にも追手かと心配する境涯を嘆き、一同が悲嘆に暮れると、弁慶が須磨での戦いを物語り、やがては頼朝の心も解けて、兄弟の仲ももとに戻るだろうとはげますまで。なお「曽美加久堂」とは修験者のこと。

七、常磐津　戎詣恋釣針（釣女）

明治十六年（一八八三）十二月、花柳寿輔のおさらい会で初演。河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部作曲。その後に竹柴晋作が加筆して、明治三十四年七月に、しばらく分裂していた常磐津、岸沢が和解した時の披露曲として東京座で初演された。狂言「釣針」を脚色した松羽目もので、おおらかな楽しい語り物になっている。

妻のない大名と太郎冠者が、西ノ宮の恵比寿三郎殿に妻を申し受けようとでかける。道行があり、参拝して通夜をすると、二人とも同じ霊夢をみる。落ちていた釣竿でまず大名が妻を釣り上げる。美しい上臈なのでめでたく祝言になる。それを見ていた太郎冠者も、一生懸命に釣り上げて、顔を見るとこれがすごい醜女であったというお話。もとの狂言では、古くは醜女を釣るのは大名になっていたが、江戸時代からは太郎冠者が釣るようになったという。

夫婦の縁が不思議なものであることは、誰でも知っている。この縁は神様がきめたことなので、人智の及ぶところではない。現在の考え方では、神様にお願いして妻をきめるなどとは、おかしいかも知れないが、妻をお願いする「申し妻」、子供をお願いする「申し子」などというのは、つい最近まで行われていたことで、それを強調したものと考えたい。

第二部

一、義太夫　関取千両幟—櫓太鼓曲弾き—

「関取千両幟」の相撲場には、古くから三味線で櫓太鼓をあらわす工夫がなされてきた。それを主にして、さらに三味線の曲弾きを加えておきいただくという趣向。

三味線の曲弾きは、江戸時代に寄席などで行われ、また文楽などでも行われたが、現在ではほとんど公開の場での演奏は見られなくなった。技巧としてはたとえばバチを天神から胴へ飛ばしたり、バチの才尻で弾いたり、糸の下をくぐらせたり、三味線を裏返して皮を指で叩いたり、三味線を持ち上げて弾いたり、立てて弾いたり、左右を逆に持って弾いたりといった曲芸的な演奏のほか、他流で特色とする三味線の手をそれらしく弾いたりなど、演奏家により、またその時の気分で変化をつけたという。技術的に余裕があり、腕達者な演奏家がさまざまに工夫をこらしてきたというが、今日はどのような曲弾きが演奏されるか、楽しみである。これは舞台をよほど注意していないとききそびれ、見そびれてしまう。

二、新内明烏夢泡雪―雪責め―

初世鶴賀若狭掾作詞・作曲。安永元年（一七七二）ごろの作品と思われる。ふつう上下にわけ、上を「浦里部屋」、下を「雪責め」という。全曲を演奏すると一時間半ほどもかかる大曲なので、今日はそのうち下の「雪責め」を演奏する。

春日屋時次郎は、山名屋の浦里となじみを重ね、借金で首がまわらなくなったので、もう死ぬよりほかはなくなった。今日もその相談と、時次郎は浦里の部屋に隠れていたが、遣手のかやに見つけられ、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎は若い衆にさんざんに叩かれた上、表へ放り出されてしまう（ここまでが「浦里部屋」）。

さて雪の降る山名屋の中庭で、浦里とかむろのみどりは古木に縛られ、亭主に折檻される。亭主はお前のためだからと、時次郎と別れたほうがいいというが、浦里はあきらめられない。やがて隣の二階座敷から三下りのメリヤスがきこえてくる。浦里はみどりを、みどりは浦里をいたわり案じる。その心根はあわれである。二人が嘆いているところへ、屋根伝いに時次郎が助けに来て、二人の縄を切り、塀を越えたと思ったのは夢であったというまで。

降りしきる雪、黒板塀、松の古木、そこに縛られた派手な衣裳の遊女浦里とかむろのみどり。絵のような場面で責められる二人。きこえてくるメリヤス。まことに色彩感覚にあふれている情景。

三、清元弥生の花浅草祭（三社祭）

二世瀬川如皐作詞、初世清元斎兵衛作曲。天保三年（一八三二）三月、中村座で初演。もとは上下の曲で上は常磐津。三社祭の山車人形の神宮皇后と武内宿祢が出る。それを引き抜いての下の巻は宮

戸川の場面。二人の漁師が網を打っていると、空から善と悪と書かれた玉が降ってくる。それが二人に乗り移り、踊るという筋。

浅草の三社祭は、現在では毎年五月の十七日・十八日前後の土・日曜日に行われるが、江戸時代には隔年で、旧暦の三月十七日・十八日に行われ、天下祭といわれた山王祭、神田祭にも劣らぬ賑わいを見せた。三社というのは、浅草寺の本尊である一寸八分の観音像を、宮戸川の網打ちで引き上げた檜前浜成・竹成兄弟と、その主人土師直中知を祀ったもので、浅草寺の総鎮守として境内に立派な社殿が建立されている。

この曲はその三社祭を当て込んで上演されたものだが、必ずしも三社祭を再現したものではない。とくに善玉悪玉のくだりは、山東京伝の黄表紙『心学早染草』に描かれた悪魂の踊りによるもので、以前に「うかれ坊主」（文化八年）で踊って流行していたのを取り込んだ。無意味なばか騒ぎのような早間の踊りだったが、いかにも文化文政期の頽廃した社会にうまくマッチして、大流行した。

四、尺八巣鶴鈴慕

尺八曲のなかでは十八世紀中ごろ以降、もっともよく知られた曲。宗教的ではなく、芸術的な曲として「鹿の遠音」と双璧をなしている。都山流では「鶴の巣籠」という。

作曲年代はわからないが、胡弓と関係が深く、天保年間（一八三〇～四四）に尺八曲から胡弓に移したという説がある。同名の曲が多く、古くから各地の虚無僧寺で伝承されてきたが、その伝承関係は明確ではない。内容は、雛鶴の誕生から巣立ち、親鶴の死まで、子を育てて別れるまでの喜びや悲しみを描いた標題音楽で、擬音的な効果音や特殊奏法が多用されているのが特色。

五、常磐津　勢獅子劇場花冒

三世瀬川如皐作詞、五世岸沢式佐作曲。嘉永四年（一八五一）四月、中村座初演。能の「石橋」を和らげて、手古舞の獅子頭に芸者が扇を蝶になぞらえて連れて踊る。江戸の粋な祭礼風俗を見せるもの。芝居の曽我祭を意識して「夜討曽我」の趣向が取り入れられている。

江戸の三芝居では、初春興行に曽我狂言を出すことになっていた。その曽我狂言が大当りを続けると、五月二十八日には曽我祭を行った。この日は曽我兄弟が敵工藤祐経を討った日である。楽屋に十郎・五郎の霊を勧進して慰め、舞台では趣向をこらして余興を行ったが、文化年間で伝承が絶えてしまった。それを再現して見せたのがこの曲。初演の時は曽我祭だったが、慶応三年（一八六七）に再演の時から山王祭になり、以後省略された形で山王祭で踊られることが多い。

六、荻江鐘の岬

宝暦三年（一七五三）に初世中村富十郎が初演した長唄舞踊「京鹿子娘道成寺」は、それまで上方でも行われていた数ある「道成寺もの」の決定版となった。

それがふたたび上方へ逆輸入され、同九年大阪中山座の二の替り「九州釣鐘岬」の大切に中村富十郎が「江戸鹿子娘道成寺」の題で再演したが、そのときの唄が地歌に残った。曲は深草検校作曲ともいう。その「古道成寺」を短縮したものに手事を補い、本調子手事物にしたのが菊岡検校で、「新娘道成寺」という。これは別に「新鐘が岬」とも、ただ「鐘が岬」ともいったが、それをさらに幕末のころ荻江節に取り入れ、曲名を「鐘の岬」とした。したがって歌詞はそれらと共通だが、曲の趣はすっかり江戸風になっていて、よく演奏される。

荻江は、江戸吉原で男芸者たちが長唄を演奏する時の芸名で、独特な唄い方で喜ばれていたが、明治維新後は伝承する人も少なくなった。しかし明治も後半期ごろから古曲のひとつとして、主に河東節の演奏家が大切に伝承してきた。三味線だけの演奏を原則とするが、最近では演奏効果を考えて、今日のように箏を加えて演奏されることが多くなった。

七、長唄勧進帳―読上げ問答入り―

「勧進帳」は第一部で演奏される「越後獅子」とともに、長唄の代表曲としてよく知られている。ふつうの長唄だけでの演奏は、「勧進帳」が元来舞踊劇の地（一種の伴奏）として作られたので、歌詞だけをきいていたのでは意味の通じないところがある。それにもかかわらずもてはやされているのは、劇としての「勧進帳」がよく知られていること、また音楽としてよくできていること、さらには演奏しやすいことなどがあげられよう。いずれにしても長唄の美点を集大成したといっていいほどの名曲で、よく演奏される。

作者は三世並木五瓶、作曲は四世杵屋六三郎（のちの六翁）が一世一代としてその技量ふるったもので、作曲には三か月を費やしたという。それもはじめは全曲二上り調の説教節じみた節付だったのを、のちに工夫して現今の本調子主体の曲にしたと伝える。

しかし、できるならば話の筋がよりわかりやすい曲をききたい。そこで「安宅新関」と一緒に演奏することが行われたが、いつはじまったのか未詳。明治四十三年（一九〇一）に行われた四世吉住小三郎、三世杵屋六四郎（二世稀音家浄観）らによる演奏が集成曲としての初演というが、それ以前と

いう説もある。「安宅新関」は、名乗り、読上げ、山伏問答など、歌舞伎の「勧進帳」で長唄が関与しない部分を詞章とし、大薩摩を主に節付したもので、十一世杵屋六左衛門が作曲したもの。慶応三年（一八六七）成立というが、こちらも正確な年代はわからない。しかし、いずれにせよこの演奏が成立してからは、「問答入り勧進帳」などともいわれて、よく演奏されるようになった。

御礼　邦楽連合会

本日はようこそおでかけ下さいまして、ありがとうございました。何かと不行き届きの点もございましょうが、お許しを願いまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願いを申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御観賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年も、同じここ国立劇場小劇場で、三月二日（土）に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう。お願い申し上げます。今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合せてお願い申し上げます。